# World Transplant Game in Spain, Malaga 2017 story

# Departure 24th June

羽田組9名、関西空港組10名、皆定刻に集まり、元気に出発した。

出発メンバー紹介は既出のとおり。

前回経験から、競技場間での連絡に個人のスマホを用いるにあたり、事前に戸塚さんが Wi-Fiを3台借りておいてくれた。



ドバイでの乗り換えは 1 時間しかないので、夜間からだが不自由になる恵子さん(若松力さんの奥様・生体ドナー)のために、事前にエミレーツ航空に車いすで移送援助を申し込んであった。飛行機を降りたタラップから空港に入る途中で車椅子が待っていてくれたので、先に行った戸塚さんたちに伝えられず、若松夫婦と僕は一行と離れてしまった。ドバイを立つ飛行機の搭乗口に行くには、列車での移動や、手荷物検査があり、ちゃんとできているか心配だったのだ。普通では通れないような暗い近道を潜り抜け、搭乗口で関空組と合流したが、まだ戸塚さんたちは現れていなかった。心配もつかの間、はたして戸塚さんたちが現れた。それではみんなで、スペインへ出発。

しかし、ドバイまで 11 時間、マドリッドまで 6 時間半はなかなかこたえた。途中事前に打ち合わせておいたように免疫抑制剤の内服を、声かけして確認した。

マドリッドの航空にはターミナルが4つあり、それぞれの間は列車での移動となる。

エミレーツ航空の到着も、イベリア航空のチェックインカウンターも T4 だった。しかしチェックインはなかなかのんびりしている。チェックインした時、倉田君、杉山さん、そして僕のチケットの座席番号が、SBY(Standby=待機、つまりオーバーブッキングの意味)だった。「キャンセルされた恐らく乗れるだろう」と係は言うし、仲間の中でもオーバーブッキングの経験者がおり、「乗れなかったことはない」と言う。しかし、2 時間半前にチェックインして直行したにもかかわらず、搭乗口にはすでに長蛇の列、そして、スタッフが言うには「Seat is completely full!」 しかも僕らが悪かったような言い方。交渉しようにも、

けんもほろろに「カスタマーサービスへ行け」とだけ言われて書類を渡された。1 本後の便 も満席だという。

仕方なくホテルと翌日一番の航空券を手配が済んで、バス乗り場へ。空港近くのホテルへ行くバスはちっとも来ず、1時間ほど待った頃に、ふと気が付くと、ホテルの電話番号表が貼ってある。どうやら呼ばなきゃ来ないらしい。他のみんなは無事にマラガについたとの連絡があった。その日のレジスターを行うよう空港に案内があるという。夜に到着する国と翌日の国があるので、今日レジストリーが行われなくてもよいはずだ。

日本を出て、12,000km、実に 28 時間後にやっとホテルに着いた。こちら組は、マドリッドのホテルに到着して、やっと、ホッとした気分となったが、明日朝は 6 時起きで出発なので、寝るときも気が抜けないままであった。後で考えたが、昨日の航空機は 2 列席、今朝の航空機は 3 列席で、昨日のオーバーブッキングは乗客数から判断して、僕ら 3 人を乗せないほうが、経営効率が上がると判断してのことだったのだろうと思い至った。うーむ、外国ではいろいろなことが日本とは違うものだ。出だしから全く気が抜けないと、気を引き締めるのであった。

#### **Day1** 25<sup>th</sup>

何事も心配してしまうのだが、先に着いていた人達は、各々で朝ごはんを済ませてくれたようだ。おいてきぼり組がマラガ空港に着いたのが 11 時。マラガはスペインの南、アンダルシア州にあり、Costa del Sol (太陽の海岸) といわれる観光で有名な地域の中心地である。空港では、マラガの隣、トレモリーノスにある日本チームのホテル行きのバスに、現地 WTG スタッフが誘導してくれた。今日が大会初日なのだ。

まずレジストレーションを行わなくちゃならないが、予定が大きくずれていることを考慮し、一旦ホテルでみんなと合流し無事を確認してから(心配性!?)タクシー(2500 円くらい)でマラガに戻り、レジストリーと 13 時開催のチームマネージャーミーティング(TMM)が行われる NH ホテル(NH)に行くこととした。

バスに乗って、これでホテルに着くと思うと周りの景色を見る余裕が出てきた。抜けるように青く澄み渡る広い空の下に、強い日差しの中に映える、橙から褐色の瓦屋根作りの欧風の家々。南国とはまた違う木々の緑とのコントラストも美しく、南には地中海が広がっている。ああ、これがスペイン、アンダルシアの街かぁ。



ホテルのロビーで、下野理事長はじめ、落さん夫妻、若松さん夫妻、仲里さん夫妻、菊地 さんご家族 3 人、敬太君が迎えてくれた時には、ほんの一晩会わなかっただけなのに、ず いぶんほっとした気持ちになった。

キャプテンの戸塚さんは Fit for Life 日本大使である。これは、WTG が募集した、世界各国から十数名の移植者で、自分たちの健康回復をスポーツを通じて伝える、という使命を持っている。Fit for Life の一環であるエキジビジョンサッカーに戸塚さんが出場するため、奈々枝ちゃん親子、下野理事長は吉川先生とともに、会場であるマラガ大学に応援に出かけていた。

手早く挨拶と連絡を済ませ、僕はさっそく TMM のために NH に向かった。夜まで帰れないから赤いユニホームジャケットを着込んで出かけた。車椅子の受け取りがあるから若松さん夫妻も付いてきてくれた。NH では、選手登録と T シャツやバッグ、バッヂなどの受け渡し、各種催しのチケット、そして、恵子さんのための車椅子を受け取ることにもなっている。

TMM は、WTGF スポーツマネージャーのゲリーの司会で、現地の組織委員(LOC)代表

と、各国のチームマネージャーの会議で、毎日夕刻に行われる。その日に起きたことについての質疑応答と、翌日の重要な事項、例えば、水泳の予選が行われるかなどの連絡が行われるため、大変重要な会議な上、内容が口頭でしか話されないことが多く、聞き取りが大変であった。

開会式は夕方 17 時からなので、他のメンバーとは会場であるマラガ闘牛場で落ち合うこととした。戸塚さんたちと NH で合流し、恵子さんの車いすを力さんが押しながらマラガの町並みを歩いていくと、地中海を見下ろすように建つ古城が現れた。中世の趣を残すこのヒブラルファロ城は城壁しかないが、訪れる人は手すりもない城壁の上を歩いている。丘の上にあるので、これから行く闘牛場やマラガの街、そして眼下に広がる地中海が一望できそうだ。

会場でホテルからバスで来る組と一緒になり、例年のごとく混沌とした雰囲気の中、選手以外はスタンドへ。各国の象徴色でそろえたサポーターがそれぞれ陣取ってスタンドを埋め尽くし、色とりどりの光景となっている。入場行進が始まると、日本チームを含め 52 カ国の選手が、国名を掲げるプラカードボーイに誘導されて、ユニフォームでフィールドを一周していった。チームただ一人の生体ドナーとしての参加である恵子さんは、車いすを力さんに押されてのパレードとなった。







そして、一段大きな拍手の中、ドナーファミリーがアリーナを一周した。入場行進の後、 アリーナでは、白い衣装の踊り子とともに巨大人形が現れ、臓器が体に入っていく場面も ある、ちょっとドキッとするダンス、そのあと馬とフラメンコのダンスが披露された。そ の間にカクテルパーティーの準備が行われ、開会式の後、参加者全員がアリーナに下りて、 パーティーでの夕食となったころには、もうとっぷりと日が暮れていた。

#### **Day2** 26<sup>th</sup>

朝はホテルの食堂で、朝食を各自済ませて、バスでミハス見学に出かけた。ミハスは、スペイン・アンダルシア州マラガ県のムニシピオ(基礎自治体)。コスタ・デル・ソルにあり、白い村の中心的な町として、国内で有数の観光地となっている。

日程上この日しか皆で揃って出かけることはできないため、ツアーを考えたのだが、僕の TMM の時間や、戸塚さんの大使の集まりを考慮すると、ジブラルタル(イベリア半島の南 東端に突き出した小半島を占める、イギリスの海外領土)や、アルハンブラ宮殿(スペインのアンダルシア州グラナダ県グラナダ市南東の丘の上に位置する城塞・宮殿)は無理で、バスで 1 時間かかるミハスまで足を伸ばすのがやっとであった。仲里さんは、ボウリングの練習のため、吉川先生に付き添ってもらい会場に出かけていた。

さんさんと降り注ぐ日差しの中を、道沿いに建つ風情のある建物に感心しながら、みんなで連れ立ってバス停を目指した。あまりに急な上り坂には、有料のエレベーター(€0.5)があり、それを降りて南を振り返ると、青く広がる地中海が、緑の木々の中に立つ瀟洒な家々の向こうに開けていた。バス停をやっと探し出し、みんなでアイスキャンディーを食べて一息つき、バスに乗り込んだ。山道を 1 時間も揺られて、目の覚めるような白壁が立ち並ぶ街、ミハスに到着した。わずかな時間だったが、馬車で町中をめぐり、昼食や見学など楽しいひと時であった。帰りのバスで揺られながら、恵子さんから、「スペインといえばダリ、彼の作品で『アンダルシアの犬』があったわね」と教わった。遠い昔の記憶に見たことがあるような気がするのだけど…。

ホテルに戻ってすぐに戸塚さん、下野さんとともに NH ヘタクシーで出かけ、17 時から TMM、そのあと戸塚さんが大使として呼ばれた、Fit for Life の集まりがあった。





夕食のかわりにパーティーで出てきたのは…、少なくともスペインを代表する料理ではなかった。

咲帆ちゃん一家は、大会主催のキッズ向けイベントに出かけて、各国の子どもたちと交流 の機会を持ってもらった。

### **Day3** 27<sup>th</sup>

今日から本格的な競技の開始である。朝の支度をして、朝ごはんを食べ、ランチボックスをホテルの特設デスクで受け取って、朝 7 時出発のバスに乗らないといけない。しかも、今日は 4 つの会場に分かれて行動しなくてはならず、昨晩のミーティングでよく打ち合わせたとはいえ、ちゃんとエントリーできているか、会場で迷子にならないかと、心配で朝早く目が覚めた。

会場の遠いペタンクに戸塚・渡邉ペアが出場、サポートは倉田くん。水泳の練習に若松夫妻が行くが、出発のバスは 9 時と遅めだ。夜と朝でパーキンソン病のための薬の効きが違う恵子さんにとっては好都合だ。水泳会場に近い体育館で行われるダーツに下野さん、落さんが出場、サポートは落美代子さんと杉山さん。僕もこちらに行き、水泳のほうもカバーすることとした。別方向に離れた会場での男子ボウリングに仲里さん、敬太くんが出場し、中里広子さん、吉川先生がサポート。さらに男子とは別会場の女子ボウリングに奈々枝ちゃん、咲帆ちゃん、奈々枝ママの美香保さん、咲帆ちゃんのご両親(英語はばっちり)で出掛けてもらった。

レジストレーションのときに紹介された日本チームのボランティアのアメリカ人ジャックには、女子ボウリングに来てもらった。彼は実は、完全内臓逆位が原因で心臓移植を受けることになった移植者であった。移植後 10 年であり、術後断酒したという。かつてはアメリカ移植者スポーツ大会、WTG にも出場し、水泳で銅メダルを取っている。今年は眼の問題があって、ボランティアで参加したとのことで、全く日本語はできないが、日本のことを好いてくれており、日本チーム付きのボランティアを申し出てくれたのだそうだ。なんと奇特な人かと思っていたら、ドナーファミリーに会うためにきているのだと教えてくれた。

広々とした敷地にある体育館で、ダーツとバドミントンが行われる。ここは、陸上競技場の隣にあり、その向こうに水泳会場、テニス会場がある。歩いていける距離なのでサポート、応援に行きやすい。

下野さんと、落さんは 60 代個人のダーツに出場した。落さんの奥さん、美代子さんは、大会への意気込みとして、日本を含む 10 か国の国旗のネイルアートをして臨んでいた。落さんは、人工心臓を装着した状態で、日本人最初の退院を経験した方である。在宅の移植待機者として主治医の温かいフォローがあったおかげなのは言うまでもないが、一日中気を遣わなければならない人工心臓の管理を、落さんご夫婦は二人三脚で乗り越えてこられたのだ。そして、国内で心臓移植を受けることができ、無事に現在に至っている。その対価としての世界大会参加を、美代子さんはとても楽しみにしてくれていた。現地のダーツ協会のスタッフが進行してくれ、救急隊員(たぶん)と思われる容姿の屈強な男性が会場内に常駐してくれた。試合は「301」というルールで行われ、各年代別のトーナメント方式だった。お二人のクラスは6人出場で、見事二人とも3位表彰台となった。

試合中、ペタンク会場から電話が。最もサポートの少ない会場からだけに、緊張した。なんとエントリーされていないという。事前登録はしてあることは確認ずみなのに…。電話口にスタッフに出てもらい、何とか頼み込んで出場棄権国の枠に入れてもらった。初参加の渡邉さんにはその動揺もあったのか、戸塚・渡邉のペタンクチームは初戦タイに押され、せっかく重たいペタンク球を戸塚さんが日本から運んだのに、予選惜敗に散った。





仲里さんはマイボールで臨んだボウリング(シングル)であったが、並み居る強豪の中善戦したが、メダルには届かなかった。初参加の敬太くんは、緊張からか実力を発揮できなかった。でも持ち前の元気さで友達ができたようだ。ディフェンディングチャンピオンの奈々枝ちゃんもレーンの油の乗りが会わなかったようで、惜しくもメダルに手が届かなかった。そんな中、光ったのは、咲帆ちゃんの接戦の末に獲得した金メダルであった。ご両親やジャックが熱心に応援してくれたことも大きな励みだったと思う。





夕方には、臓器提供者のことを市民に知ってもらう目的で、ドナーレコグニションウォークが海岸通りで行われた。事前登録制での参加となり、各国から多くの人が集まって、移植ドナーへの感謝と一般の人々への呼びかけを行った。TMMと並行して行われるので僕は行けなかったけれど、日本チームからは下野理事長、戸塚キャプテン、渡邉さんらが参加して通りを練り歩いた。

この日の夜、バルセロナから日本人の K さんが応援に駆けつけてくれた。彼女は、10 年来スペインで働いていて、2013 年に進行した腎不全が見つかり、透析導入後に日本で 2014 年に生体腎移植を受け、その後元気になってスペインに戻って働いていたのだ。WTG がスペインで開催されることを伝えたところ、出場は難しいけれど、お手伝いできることがあればと言ってくれたので、仕事の合間を縫って本日、日本チームのみんなと会食することにしたのであった。

海岸通を歩いて、海辺の開放的な感じのレストランに入り、ドナーレコグニションウォークの参加者も帰ってきて、20人でテーブルを囲んでの晩餐となった。K さんとは、移植手術後経過が良かったので、術後 1年の帰国時に外来に来てもらって以来だ。本人は、周りに移植者がいないので、ぜひ境遇を共にする人との語らいを、と希望されていたから、できるだけ皆さんとお話をしてもらった。これから観光地を訪れる予定の人は、彼女からスペインでの交通のことを聞いたり、食べ物や、通院のことを教えてくれたりした。

スペインの医療費は無料であり、高額の薬代は 1 割程度の負担となっているようだ。小柄な彼女だが、板についたスペイン語での店員さんとのやり取りはなかなか颯爽としていた。一方、彼女からは、「移植後、こんなに元気な人が沢山いるなんて、とても驚きです」と言われた。スペインは、世界で最も臓器提供数の多い国で知られるが(そのため、生体移植はほとんどない)、その国であっても、移植後にどの程度健常人と変わらぬ生活ができるのかは、あまり知られていない様子であった。もちろん、移植をしていない人は皆、スポーツ競技会に出るのが普通なわけではないから、スペインまでスポーツ競技のためにやってきた移植者に驚くのは無理からぬことではある。しかし、移植医療によって、スポーツができるまでに回復した姿を通じて、この医療の必要性、重要性を伝える活動は、まだまだ道半ばであると感じた。

#### **■ Day4** 28<sup>th</sup>

今日は最もメダルが期待されている水泳競技が行われる。若松力さんは、60 代のカテゴリーでの出場だ。これまでの世界大会記録をご自身がマスターズの試合に参戦されている記録と見比べ、確固たる自信を持って臨んでいる。ドナーである妻の恵子さんにも出場を誘い、本大会で特別に行われる、生体ドナー競技、50m 自由形に向け、恵子さんは特訓を繰り返してきたという。

競泳会場のスタンドに日本チームが陣取り、日の丸を手すりにかけて、応援の準備をした。 僕の準備は、恒例に従い、万が一に備えて 250m ほど泳いでおいた。杉山さんは応援団長と して、日の丸鉢巻きに日の丸扇で必勝祈願しつつ、声援を送ってくれていた。もっとも古 くから世界大会へ参加されていた移植後 31 年のベテランだが、今年は体調のこともあり、 サポーターとしての参加を申し出てくれ、各会場で熱心に応援していた。





さて、水泳は、イギリスの移植者水泳チームが断然強く、イギリス水泳チームのユニフォームを着ているのは少なく見積もっても 30 人以上いそうだった。アメリカやオーストラリアもいつも良い成績を残している。そんな中、若松さんの娘さん御夫婦が日本から応援に駆けつけた。パーキンソン病のお母さんが、海外旅行ができると思っていなかった上に、水泳競技に出ると聞いてサポートを申し入れてくれたのだ。力さんの応援ももちろんだ。そんな応援のおかげもあり、力さんは予告通り、200m、100m の自由形と、50m バタフライで見事金メダルを獲得した。そして、前二者は事前の公言通り世界大会新記録だったのだ。つまり、60 代最速移植者スイマーなのだ。

表彰に当たり、ちょっとしたハプニングがあった。なんと、力さんが準優勝でコールされたのである。これは明らかに開催スタッフのミスなのだが、彼らは次から次へと行われる競技の、プリンターから打ち出された結果を元に順位を発表するだけであった。

一方、参加競技の多い力さんをサポートして、応援するボクらは、結果が張り出されたのを確認していなかった。後になって思うと、公式記録にする前のクレームをいう時間があったのかもしれない。しかし、表彰式でたまげた僕は、先のエントリーミスのことも思い出されて、瞬間湯沸し状態となっていた。ほとんどスペイン語で話す彼らに、チームマネ

ージャーとして何とか真実を伝えなければならないが、有効な方法は・・・写真だ!幸い、力さんの記録が電光掲示板に載っているところを、僕は嬉しくなって自分のカメラで撮っておいたのだ。それを見せてスタッフと交渉しているときに、なんと 2 位になったオーストラリアの選手がやってきて口添えしてくれた。実は彼の記録も、世界大会記録を塗り替えていたのだが、運悪く力さんの出場により優勝できなかったのだ。そんな彼のフェアな態度は、移植者同士を思いやる連帯感のなせるものかもしれないと思った。

この日、ほとんどのメンバーが水泳の応援のためにスタンドに詰めていて、順位間違い騒ぎの成り行きを皆、心配して見守っていてくれた。金メダルが決まった表彰台に向かって、 チームみんなが大歓声を送ると、力さんは誇らしげに日の丸を掲げたのであった。



下野理事長は昨日からの腰痛をおして卓球に出場し、フルセットマッチまでいったが予選で惜敗となってしまった。ボウリングでは、仲里、落組はリベンジを狙ったが、メダルには一歩及ばなかった。このダブルスのエントリーも抜けていたため、吉川先生が交渉して参戦が可能となった。

試合が終わり次第、皆は夕方から自動車博物館で行われるカルチュラルナイトパーティーの準備のために、ホテルに戻った。この集まりは、各国から自国を象徴する格好で参加して交流を深めるもので、「日本チームは和服で揃えましょう」と事前に呼びかけ、皆さん浴衣での参加となった。特に女性陣は華やかで、各国のメンバーが、「並んで一緒に写真を撮りたい」と言ってきてくれた。チロルの衣装やメキシコの覆面レスラーとサボテン帽子も周囲の目を引いていた。また、会場内の特設舞台ではフラメンコが催され、自動車博物館は自動車が発明される頃からの歴史的な車が、その時代を象徴するドレスとともに展示されていた。その中には、マイケル・ジャクソンの愛用したロールスロイスも、彼の衣装とともに飾られていた。せっかくなので、昨日から来てくれた若松さんの娘さん夫婦、Kさんも招待し、夕暮れ時に体の自由が利きにくくなる中でも着付けをこなした恵子さんとともに、夕暮れのひとときを楽しく過ごすことができた。





さて、ここで個人的に書き記しておきたいことがある。この度の僕の立場は、チームのマネージメントを任された責任を果たすことで、そのために毎日 TMM に出かけているのだが、敬太君が僕の行動に関心を持ってくれて、本日 TMM に付いてきてくれた。

中学 3 年生の彼は、高校受験を控え、将来は医療に関する道を選ぼうとしてくれていると教えてくれた。アメリカで移植のために過ごした時間の中でも、小児病棟でいろんな国の子どもと仲良くなる中で、英語でのコミュニケーションも身についている様子が伺えた。僕が初めて TMM に参加した時、50 以上の国のチーム代表が来て、自国の選手のために、必要なことははっきりと言い、納得がいくまで引き下がらず交渉する態度に圧倒された。今ではそれが、国際大会を乗り切るためには必要不可欠なことが分かってきた。そんなことの一端でも知ってもらえる機会は、きっと彼の今後のためになると期待している。

バドミントンダブルスのエントリーは、やはりできておらず、TMM でのスポーツ担当者との交渉でも種目担当責任者の判断だということで平行線であった。

夕方にはビーチでキッズ向けプログラムがあり、咲帆ちゃんがご両親とともに参加した。

## **Day**5 29<sup>th</sup>

本日は水泳競技2日目、若松さんの5冠達成(1人5種目までしかエントリーできないため。 ただし国別リレーは別)のための残り2種目と、恵子さんのドナーの競技、敬太君の最も期 待がかかるレースが行われる。水泳のリレーは仲里さんの腰痛、戸塚さんの日程調整がつ かず、棄権とした。

会場でフランス、ルーマニアのチームマネージャーと知り合い、分かってきたことだが、 ダブルスの登録に書類不備があったらしい。選手登録状況はドロップボックスを使って配 布され、大会直前に出ていたようだが、そのメールが僕のところに届いていなかったこと が分かった。大会では前大会まで慣例であった、紙でのエントリー表が配られず、大会開 始直後には各試合での選手登録確認に難渋した。水泳競技前日にやっとそのドロップボッ クスを開けるようになり、すべてのダブルスのエントリーができていなかったことに気付 いたのであった。あきらめるわけにはいかないから、何とか交渉しよう。

期待がかかる力さんは、昨日緒戦の緊張した表情とは打って変わって、リラックスしていた。昨日 3 人とも練習で泳いで(僕を入れると 4 人)、飛び込みも練習し、会場は把握できた。コールルームの雰囲気も分かってきたからだろう。一方で敬太君のほうが硬くなっていた。そして、恵子さんはこれまでの疲れもあって、少し弱気になっていた。出場のコールがされるまで、迷っていたが、朝からの自分の調子を確認し、スタートを決意したのだった。結果は、力さんは 400m、50m 自由形をともに世界大会記録で優勝、敬太君は見事銅メダル、恵子さんも立派に完泳した。応援するほうも力の入る 1 日であった。







テニスに戸塚キャプテンが出場、出場人数も多く 6 ゲーム先取のトーナメント制だ。吉川 先生、渡邉さんらの応援の中、善戦したが予選惜敗であった。大会も日を重ねてきており、 終わった人は早めにタクシーで帰り体を休めてもらった。

TMM のあと WTGF 総会があり、各国代表者による投票で理事選挙が行われる。TMM には、日本の登録組織である日本移植者スポーツ協会の下野理事長が投票者となるので、一緒に行ってもらった。各国候補は1名までで、選出7枠に、5人の再選候補も含め13人が立候補していた。僕は移植学会の推薦とスポーツ協会の承認により立候補することとなっていた。

演説では、東日本大震災の後、毎日のように透析施設を捜し歩かねばならなかった患者さんが数多くいて、腎移植の機会が少ないことがまねいた悲痛な状況と、その打開のための移植医療の理解促進を行政に認識してもらうために、WTGFの理事が日本から選ばれることが大きな意味を持つことを訴えた。さらに、スポーツ競技を通して移植医療を啓発するのに、東京オリンピックは絶好の機会であることを訴えた。

1人当たり3分間の演説時間が与えられるとだけ知らされていたので、なんとかその時間内でこの内容をまとめたつもりだった。一方、3分を守ったのは僕だけで、いかに自分がどれだけ移植医療にかかわる人物かを、スライドショーも交えて立派に演説する人がほとんどであった。医師は少数派であり、移植団体のリーダーとして活動いてきた人も多く、確かに個人個人が国際組織に所属する価値のある人たちだなと感じた。選ばれた中に JAPAN はなく、申し訳ない気持ちでいっぱいであったとともに、世界の壁の大きさを改めて知ったと思った。こんな僕の演説であったが、この度の理事選挙演説の応援に、疲れた体を押して、日本チームのほとんど全員が来てくれた。そんな国は日本だけだった。そして、拍手は一番大きかったと言って、僕を励ましてくれた。みなさん、心から感謝しています。そして、会の終わりの時間が非常に遅くなってしまい、この日の食事のこともきちんとできず、皆さんに迷惑をかけてしまうことになり、申し訳ありません。反省しきりの1日であった。

#### **Day6** 30<sup>th</sup>

大会も終盤となってきた。日本チームの競技も、残すところ、陸上競技とバドミントンとなった。出場競技の終了した若松夫妻、落夫妻、杉山さんは、若松さんの娘さんご夫婦の 先達でアルハンブラ宮殿見学に出かけることとなった。気を付けていってらっしゃい。

さて、ここまでみんな、朝食をとってから毎朝 7 時のバスに乗り遅れないように、早起きを続けてきた。スペインの夏は日が長く、夜が遅い。夕食も通常 20 時以降だという。そんな地元のペースに合わせて大会のイベントは組まれているので、どうしても就寝時間が 24 時近くになってしまう毎日であった。食事のほうも、ホテルの朝食は、味は日本人好みとはいえ、ハムやベーコン、チーズが主で、やや塩分多めな上に、毎日ほとんどメニューが同じで、ランチボックスも大きなパンに挟まれている具が変わる以外は、毎日果物とスナックと水がついているだけだったから、そろそろ飽きてきているに違いなかった。数回以上参加しているメンバーは、覚悟できているものの、今回参加した人たちは、食べ物もスペイン大会の楽しみの一つだったろうに、と思うと、時には外のカフェに連れていってあげたかったが、朝から夜まで会場での試合の手配とミーティングに追われて、自由時間のままならない自分のスケジュールではどうにもならないのがもどかしかった。だから、僕個人的には、出場しないときは他の人の応援をしてほしい反面、時間の取れるときに、体を休め、遠出ができない人も何人かで申し合わせて、マラガの街を少しの時間でも見学し、アンダルシアの雰囲気を楽しんでほしかった。





今日の陸上競技場、バドミントン会場は道路を隔てて隣り合っており、競技時間を見ながら両方の会場を行き来することができた。しかし、陸上競技のレジストレーションに混乱を極め、大会開始が 1 時間も遅れていた。言葉の問題と、役割分担の不備やスタッフの不足が原因だったと後で分かった。

さて、仲里さんの奥さんは世界大会が初めてどころか、このたびの参加のために、初めてパスポートを作ったという。それほど夫の活躍を応援する気持ちが強いというのだから、最後の種目であるボールスローに賭ける仲里さんの意気込みは凄まじいものがあった。しかも、2007年のバンコク大会では金メダルに輝いた、得意種目でもある。ボールスローはクリケットのボールを使って行われるが、日本ではあまり見かけない。そこで、中里さん

は練習のために、軟球とグローブを持参していて、会場の外で、僕とキャッチボールをして肩をほぐし、手ごたえを確認していた。結構いい感じでの遠投に付き合うことができ、 僕もよい結果が期待できると確信して、試合に臨んだ。

近年優勝しているアメリカの選手が今年も出ていて、並外れた飛距離を出していた。しかし、3投できるうちの2投目でかなり飛距離が伸び、メダルに期待がかかった。メキシコのリーダーを務める岡本さんという腎移植者も出場し、彼とも接戦となった。スタッフの手元にしか記録がなく、スペイン語での記録の伝達だから、集計した紙を見るまで結果が分からない。スペイン語のできる岡本さんが頼んで結果表を見せてもらい、なんと、仲里さんは準優勝で表彰台に上がることができたのであった。





同時進行で 100m予選に戸塚さんが出場し、見事予選通過した。しかし、10 歳ごとのカテゴリーのため、かなり不利な年齢となった戸塚さんは決勝では上位に食い込めなかった。敬太君は 100m 走に出場するのだが、聞けばユニフォームの長ズボンのままで走るつもりだという。そんなこともあろうかと思って、トレーニング用の短パンで来ていた僕は、快く短パンを貸してあげた。僕になったつもりで走れ、と励ましたのが逆効果であったか、惜しくも記録は振るわないものになってしまった。

咲帆ちゃんは、6~8歳女子の50m走に出場し、出場3人中3位であった。結果に不満足であった咲帆ちゃんは、やきもちのように頬を膨らまして次の競技への闘志を燃やしていたのだった。

期待のバドミントンシングルスでは、緒戦を順調に勝ち上がった倉田君、奈々枝ちゃんは その後も実力を発揮し、倉田君銅メダル、奈々枝ちゃん銀メダルを獲得した。おめでとう! 彼らは、この世界大会をきっかけに各国のバドミントン選手と仲良くなっていて、特に韓 国の選手たちとの交流が続いており、これまでに、韓国に招待されて国際試合に参加して きたのだ。本大会でも、韓国チームからの声援は大きく、コーチに指導も受けていた。











陸上では、選手登録に時間がかかり、予定時間より大幅に遅れたため、選手たちを会場に 残して TMM に行くこととなった。

NHに少し早く着いた時、アイルランドの TM であり、WTGF 理事のコリンズが話しかけてきた。彼は腎不全の患者さんのスポーツ大会をアイルランドで長く開催し、奥さんは透析を長く続けているという。大会中彼女が、シャント破裂して緊急入院したため、彼はスペインとアイルランドを行き来しなければならなかったという。彼も理事の改選であったが、最後の候補者演説としての内容は、心に響くものであった。また、僕に TM として、この大会についての印象や改善点についての意見を聞いてくれた。WTGF は本部として開催地の現地スタッフを支援するが、運営に過剰にはかかわらない。そのため、大会によって運営の様子がずいぶん違うという印象を僕は持っていた。そのことを話すと、もっと大会のルールに沿ってきちんと行われるようにプッシュしなければいけないといい、実際、彼は翌日の TMM で改善すべき点をはっきり意見していたのだった。

TMM からの帰りを待つみんなが、食事も取れずにいたりして、申し訳ない気持ちになりながら、21 時近くからミーティングを行った。アルハンブラ宮殿の見学組も無事帰ってきていた。

本日の戦績を皆で喜び、連絡事項を伝え、明日の朝発の陸上・バドミントン組、午後発の 閉会式組と、マラガ市内観光組に分かれて出発する時間のこと、市内組には車いすを NH まで返してもらうための手配を確認した。

今夜は、大会から推薦してもらったフラメンコ見学に出かけることになっていた。ホテル

カウンターの案内では、地図で場所を示しながら 15 分くらいで簡単に行けるようなことを言っていたが、上りの道で入り組んでいるうえに、目印がない。土地の人に聞こうとしても、スペイン語しか話さない人が多く、気後れしてしまう。みんなは文句も言わずついてきてくれるから、上りの道をせかすことはできないし、このトレモリーノスのにぎわう通りで、ろくに観光に行けなかった今日までを思うと、少しはお店に寄り道させてあげたい。開演に間に合わなければ入れてもらえないかもしれないと思うと気持ちはあせる。果たして、ぎりぎり間に合って会場入りし、本場のフラメンコを楽しむことができた。

#### ■ Day7 1st July

ついに大会最終日だ。陸上では咲帆ちゃんが走り幅跳び、ボールスローに出場し、バドミントンダブルスに倉田・奈々枝ペアが出場予定だ。昨日の TMM ですでにバドミントンダブルス選手詳細のメモをスタッフにわたしてある。

会場に着くや否や、バドミントンの責任者に尋ねたところ、トーナメント表の変更はできないため、入れてくれないという。しかし、ここであきらめるわけにいかない。2人は JAPAN の文字を背負ったダブルス用のユニフォームまで作って、ここまで来たのだ。粘りに粘って、棄権があればと言われ、他国のキャンセルが来るのを待った。また、キャンセルの際にその枠を他国にとられるかもしれないと思い、倉田君と奈々枝ちゃんの名前、ゼッケン番号を書いたメモを握りしめて、責任者のすぐ横でじっと待った。

どこかの国の TM が表れ、スタッフに何事かを告げると、責任者の彼が別の誰かと話したのち、僕に向かって'they're in.'と一言言ってくれた。サンキューと言って、その場を足早に去り、不安げな顔でスタンドから様子を見ていた倉田君、奈々枝ちゃんに準備するよう告げ、陸上会場の様子を見に行った。吉川先生が付いていてくれるからあまり心配はないが、昨日のレジストレーションの混乱を思うと心配であった。また、競技場内へはアスリートしか入れないように警備員が見張っており、サポーターはスタンドで待たねばならない。

咲帆ちゃんの両親は、昨日はアスリートのバッジを借りて入れたが、今日は大丈夫だろうか、と心配であった。両親には警備も甘くなって、競技場内へ応援にも入り、撮影もできてほっとしていると、咲帆ちゃんは両競技とも、実に僅差で銀メダルをもぎ取ってきた。この大会期間中に少したくましくなったように感じた。表彰台ではマントのごとく日の丸の国旗を背中に掲げ、誇らしげに胸を張る姿に、だれもが感激を覚えていた。





200m に出場予定だった戸塚キャプテンは、ペタンク、テニス、100m と多種目出場に加え、 昨日の 100m 決勝で太ももを痛め、無念の棄権を余儀なくされていた。

バドミントンダブルスは、咲帆ちゃん親子も声をからして応援し、3回戦まで進んだが、ドイツの強豪チームに惜敗し、メダルに一歩届かなかった。肝移植直後に名古屋で出会った

ときはまだ 2 歳であった奈々枝ちゃんが、よくぞここまで立派になった、母、美香保さんも大変な思いをしてこられただろうと、お互いをねぎらう選手たちを見ながら感慨深く感じ入っていた。そして、本大会も、練習から本番までバドミントンのサポートを完璧にこなしてくれていた美香保さんは、立派であった。





陸上競技終了に続き、閉会式が行われた。競技参加しなかったメンバーも陸上競技場に集まって、ボランティアスタッフの入場に続き、TMも入場してセレモニーが行われた。 そして、アリーナに参加全選手が降りて集まり、恒例に従い、手と手を取ってみんなで大きなサークルを作って、中心に向かって走り、もみくちゃに集まって大会の盛会を祝い、みんなの再会を約束して閉会式は終了した。





大会の最後は、ガラディナーだ。日本チームの女性陣は楚々とした和服の装いで参加し、ほかの皆は背広などのフォーマルな出で立ちで出席した。僕は和服がもとになった、最も有名なコートを羽織って参加した。各国テーブルが割り当てられた、着席のディナーパーティーであった。ここまで、みんなが大きな病気、怪我なく過ごしてこられたことに、心から感謝し、少しほっとした気持ちになった夜であった。





# Return 2<sup>nd</sup> July

あっという間の 9 日間であった。忘れ物がないこと、忘れた人がいないことを確認し、マラガ空港へのバスに乗り込んだ。空港では、帰国の途中での免疫抑制剤を飲むタイミングを確認し、成田と関西空港へ行き先が分かれる乗り換えのドバイで、解散のミーティングを行った。

その際、咲帆ちゃんのお母さんがとても印象的なことを話してくれた。「咲帆はこのたびの大会に参加し、いろいろなことを感じ取ったのだと思います。そのなかで、『私は移植者でよかった』と言ったのです。移植者でなかったら体験できなかったことが、よいものだったと子ども心に感じたのでしょう。そのことを皆さんにお伝えしようと思いました。」その言葉と、何とか無事にここまで来られたこと、競技のエントリーは綱渡りのようであったけれど皆出場できたこと、そして、自分の選挙演説に大人の全員が応援に来てくれたことを思い返したとき、感無量となって目頭を熱くし、みんなの前で僕は言葉に詰まってしまったのであった。TMをこれまで続けてきた、前理事長大久保さんのご苦労が少し分かった気がした。

皆さん、本当にありがとうございました。お互いに元気で、またお会いしましょう。

丸井祐二



